
半径2M以内で

ミナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

半径2M以内で

【Nコード】

N9919Y

【作者名】

ミナ

【あらすじ】

ありふれた雑貨にまつわる恋の話。お題に沿った読み切り短編集。
お題配付元：ToyBox様（<http://riwaharuka.web.fc2.com/>）

ブックカバーの裏側

午後9時20分。

今日はやけにいつもより遅いな、と焦れつつ帰りを待つ。

和食好きなヤツのためにせっかく煮物を作ったというのに、それはもうテーブルの上で冷めてしまっている。

メールでもしてみようか、と一瞬思ったが、そのすぐ一瞬後には既に後悔していた。

なんで私が。恋人でもなくせに。

自嘲気味に笑ったとき、玄関からロックを外す電子音が聞こえ、ドアの開閉の音が続いた。

「おかえり」

啓都（ひろと）は“ただいま”を返さない。

それは今日だけでなく、初めてこの部屋に来て以来、ずっと続いている事象だ。

挨拶の代りにひそやかな、それでいてはつきりとした溜息。

「…なんでまたいるんだよ」

「今日は煮物だよ。好きでしょ？」

答えになっていない答えに、啓都の目がちらりとテーブルに向く。席に着いてくれるかと、少しばかりの期待はすぐに裏切られた。

「メシ食ってきたし。明日早いから風呂入って寝る。お前はもう帰れ」

「…明日土曜じゃん」

休みの日に早く出かける用事なんてなくせに、と言外ににじませたのに気づいたらしい。

バスルームに向かいかけていた啓都は、軽く顔を顰めて振り返った。

「おい、出戻り。俺はさみしいお前と違って、休みに出かける相手も用事もあるんだよ」

「出戻りって言わないで！」

苛っとしてつい大声を出した私に、啓都は疲れたように溜息をついて、今度こそバスルームへ行ってしまった。

出戻り、という言葉はふさわしすぎて嫌いだ。

一回りも上の人と大学卒業してすぐに結婚。

年上の人に憧れて、舞い上がって、早々に現実に突き落とされた。

派手な女性関係に疲れ果てて、2年で離婚。

結婚式の日に、まじめな顔で“幸せに”と言ってくれた啓都は、戻った私に殊更冷たかった。

周りの人のように形だけの励ましや慰めさえくれず、ただただ、冷たい。

啓都は幼馴染みだ。

実家は間に1軒挟んだ同じ階のマンション。

誕生日は3日違いで、生まれた病院から大学までずっと一緒だった。家族のような気軽さからしょっちゅう口喧嘩はしたが、それでも啓都は優しかった。

私があんな馬鹿な選択の誤りさえしなければ、多分今でもそのはずだった。

ひどく疲れていた日々に、気づけばいつも思い浮かべていた啓都の優しさは、今はもうない。

それでもどうして啓都の部屋に出入りしているかといえば、幼馴染みの恩恵だ。

啓都の母が、啓都もひとりだし、暇なら時々食事でも作りに行つてやって、と鍵をくれたのだ。

初めて鍵を使った日、啓都は返せと言ったけれど、おばさんにもらったものだ、と言い訳して返さなかった。

今までも、何だかんだと言いながら啓都は私のわがまを聞いてきた。

それが当然という身勝手な習慣が抜けない私は、幼馴染みという藁に縋っている。

案の定、啓都はそれ以上鍵のことは何も言わなかったし、多重ロックのための暗証番号も変えなかった。

勝手に作った料理も、何も言わずに食べていた。昨日までは。

やけに遅い帰り、手つかずの料理、休日のお出かけ。

想像したくない答えが弾き出される確信にも似た予感が、胸をざわつかせる。

「女……？」

思わず自分で言葉にしまったその答えに、思いの外衝撃を受けた。

落ち着こうと、部屋を見回す。

私はそれまで、啓都のもの以外何もない、誰の影も見えないこの殺風景な部屋に拠り所を見出していた。

それなのに、今はそうは思えなかった。

啓都に拒絶され、見放されたような、眩暈に似た気分の悪さに襲われる。

最後に目に入ったのは、部屋の片隅に置いてある鍵付きの箱。

何事にも例外はあるものだ。

殺風景なこの部屋の片隅にあるその箱は、啓都のものではないものが入っていると思われる。

物騒にも南京錠までかけられたその箱が、唯一私の知らない誰かの影を知らせる。

こんなときに、そんなものが目に入るなんて。

啓都が完全に私を放り出すという例外が、すぐ目の前に迫っている気がした。

気分が悪い。

私は立ち上がり、テーブルの上の料理をゴミ入れに投げ捨てた。その惨めな姿が、自分と重なる。

例外は目前なのではなく、もしかしたら既に起こったのかもしれない。

恐ろしい想像に追い立てられるように、まだ続いていたシャワーの水音を背に部屋を出た。

啓都の部屋に行くのは平日の夜だけだ。

啓都が誰かと出かけたはずの土曜日は、啓都の傍の自分でない誰かのことを考えて苛々と過ごし、

日曜日になる頃には、そんな自分自身に呆れて疲れ切っていた。

こんなことになってようやく、自分の中の確かな気持ちに気付くなんて。

開いた口がふさがらないとはこのことだ。

そして月曜日。

沈んだ気持ちのまま、それでも意地のように啓都のマンションへ向かった。

決定的な言葉を聞くまでは、なんて馬鹿馬鹿しい言い訳をする。

心なしか震える手で鍵を差し込み、暗証番号を入力する。

ロックが外れる電子音にほっとしたりして、自分がいよいよ腹立たしい。

部屋は金曜日とほとんど変わっていなかった。

土曜日の誰かの影を見せつけることなく、相変わらず啓都のものだけが広がっている。

変わっていたのは、私が料理を捨てたゴミ入れが空になっていたこと。

そして、例の“例外の箱”がリビングから姿を消していたこと。

捨てたのか、それともどこか別の部屋に移動したのか。

“ 例外の例外 ” もあるのだろうか。

好奇心が抑えきれなくなった私は、そろそろ部屋を移動し始める。啓都が書斎として使っている部屋のドアをそつと開け、中を覗いてみたが、箱は見当たらない。

もう一つの部屋は、ベッドルームだ。

さすがにそこを覗くのは憚られたが、好奇心には敵わない。

恐る恐る覗きみると、ベッドの傍のローテーブルの上に、果たして箱はあった。

箱の蓋は閉じられている。

けれど、付けられていた南京錠は切断され、箱の脇に無造作に放られていた。

蓋を開けようとして手を伸ばしたが、やはりそれは許されないだろうと引き戻す。

“ 例外の例外 ” を期待している自分が哀しくもあり、そんな自分を断ち切るようにリビングへ戻ろうとした。

だが慌てたせいで勢い余ってつんのめってしまい、縋ろうと伸びた手の先はその箱。

床に倒れこんでしまった私のすぐ横に、手がぶつかってぐらついた箱が落ちてきた。

ガッツ。

箱の角が床にぶつかり、その衝撃で蓋が外れて中身が床にぶちまけられる。

倒れていた私の手に触れたのは、紙。

小さな長方形、つるつるとした手触りのものが、何枚も。

「 ……写真？ 」

起き上がりそれを見れば、小さなころから大学のころまでの、私と啓都の写真だった。

何枚も何枚もあるそれらは、確かにこの大きな箱一杯に詰まっていたと想像は難くない。

「でも、なんで…？」

写真を、わざわざ鍵を付けた箱に入れる必要性はどこにあるのか。切断された南京錠は、鍵をわざとなくしていたためとも取れる。

そんな必要性が、私との写真になぜあったのか。

写真を箱に戻しながら考えるが、予想さえできない。

そのとき、ビビッドなドット柄が目飛び込んだ。

写真に相応しくないその色に、私は弾かれたように反応した。

それは、昔はまって、いろいろな本に付けていたブックカバーだ。

そういえば、啓都に貸したまま返ってこなかった本が一冊あったのだった。

本を手にし、タイトルを確かめるようにカバーを外す。

「封印再度…懐かし」

自分の記憶が間違っていないなかったことに、小さく笑いが漏れる。

どんな内容だったっけ…とページを捲ろうとした時、扉に隠れたところに黒い点が見えた。

気になってさらにカバーを外すと、明らかになる黒い点の集合。

“君想う 20XX・5・4”

「な、に…これ」

それは、間違えるはずもない、何度も目にしたことのある啓都の筆跡だ。

そして日付は、私の散々に終わった結婚の始まりの日だ。

心臓が、いやな音で鼓動する。

本当に、見てはいけないものを見てしまった気分だった。

鍵をかけて“封印”したものと、それが鍵を壊した今持つ意味とは何なのか。

確かな意味を独りでは掴めきれないことも、私を焦らせる。
私はその本を手に握りしめたまま、茫然と空を睨んだ。

真っ暗な世界に、急にオレンジ色の光が差し込み、目が眩む。
それがリビングの照明だと気づいて、私は慌てた。

茫然としていた間に、とつくに陽は暮れ夜の時間になっていたらしい。

啓都が帰ってきたのにも気づかなかった。

立ち上がりかけたところで、啓都が部屋に入ってきてしまった。

「ひ、ひろ…」

「何してる」

不機嫌そうに私を見やった啓都は、私の手にしていたものを見て目を剥いた。

「…お前、見たのか」

「あ、ごめん。わざとじゃ…」

最初は見ようとしていただけに、小さな声になってしまった。

啓都はもう一度ゆっくりと聞いてきた。

「見たのか」

私は、もう声も出せずに小さく頷いた。

その途端、啓都は大きく息を吐き出して床にしゃがみ込んでしまった。
た。

驚いて啓都の傍に行くと、啓都は手で顔を覆ってしまふ。

「啓都？」

「見るなよ」

「え？ あ、ごめん…。あの、ぶつかって落ちちゃって、それで…」
言いながら啓都を覗きこむ私の顔に、啓都が手を伸ばす。

「じゃなくて、今俺を見るな、って」

「な、なんで？」

啓都の指先が顔に少しだけ触れて、私は図らずして声が震えた。
掴みきれなかった意味が、鮮明な形になった気がしたからだった。

顔の前に翳された手の指の隙間から見える啓都は、リビングの光の色を差し引いても、赤みがかったている。

「…かつこわりい」

くぐもった声でごちた啓都が、それが正解だと告げていた。

いつもの不機嫌そうな冷たい物言いじゃなく、拗ねたような物言い。昔の優しい啓都の、穏やかな物言い。

それに気づいて、急に涙が出た。

冷たくされた時には出なかったのに、今になって溢れた。

うれしい。うれしい。うれしい。

渴いていた心が、急速に満たされていく。

満たされて、溢れ出して、涙となって零れ出したのだ。

その水滴が、啓都の指に当たり、驚いて顔をあげた啓都と目が合う。

「なに、泣いて…」

「ごめん…」

「何が」

想いに気づかなくて。

幸せに、と言ってくれたのに、応えられなくて。

ずっと甘えてて。

他にも色々ありすぎて、何も言えなかった。

優しい声が嬉しくて、とにかく何か伝えたくて、咄嗟にキスをしていた。

唇と唇が軽く触れ合うだけの、中学生みたいなキス。

それすらも、震えるほどの緊張感。同時に、満足感。

「…すき」

喉が詰まって、掠れた声しか出なかった。

必死に、もう一度同じ言葉をどうにか舌に乗せるけれど、同じ声だった。

苦しくて、もどかしくて、どうにもできないでいた私を受け止める

のは、やっぱり啓都で。

宥めるように首筋をひかれて、背中をあやすように撫でられて、落ち着く。

「俺も、冷たくして悪かった。もうしないから、そんなに泣くなよ」
泣いた理由もわかってしまう辺りが、啓都らしい。

子どもに言ってみたいな言い方に思わず笑った私に、優しい視線が注がれていた。

散らばった写真を片づけながら、そっと啓都を窺う。

視線に気づいた啓都が、小さく笑って私を抱き寄せる。

ローテーブルに寄りかかった啓都と向かい合わせの姿勢で、啓都の肩の先で南京錠が目に入った。

封印が破られて、切断された錠。

けれど、今封印したのは、似合わない冷淡さと、散々な過去だ。

破られない錠のある場所に、永久に。

ブックカバーの裏側（後書き）

ちなみに。

土曜日出かけたのは、単なる休日出勤でした。

見栄張っちゃった啓都は、お風呂を出て捨てられた料理を見て我に返る、と。

啓都サイドではそんな感じの動きがあったのでした。

ストーリーに生かせない力不足をひしひしと感じます…。

“封印再度”は実際にある小説ですが、中身とは関係ありません。単に“封印”という言葉をかけさせてみたかったです。それだけです。

マウスを握る手

「ひよこ、これやり直し」

そろそろ帰ろうかな、と思っていた時に無情な声。

しかもまた“ひよこ”呼ばわり。

恨めしげに目線を右へ移すと、ひらひらとレポートが振られている。
「室長。名前、ひよりですから。ていうか、安西（あんざい）です！」

「これくらいのレポートも一発で通らないようじゃ、ひよこで十分。
この検証、結局どの年代層に一番効果的かあいまいなままだぞ。

書き方工夫しろ」

さくつと流され、痛い言葉と一緒にレポートを突き返されてしまう。
何を言っても暖簾に腕押し、こつそり溜息をつきながら戻ろうとすると、「明日までな」と追い打ちをかけられる。

これで今晚は残業が確定だ。

室長は、私と大して年が離れていないのに、私が入社した時は既に主任だった。

入社したすぐ後の直属の上司で、会ってすぐ私の名前を擦って“ひよこ”と命名するようなふざけた人なのに、

独特の手法で的確に顧客のニーズを割り出すことが上層部に評価され、

それから2年、まさに飛ぶ鳥を落とす勢いでこの販売企画室の室長にまで昇進してしまった。

それに対して私はいえ、実際3年目なのに名前のせいとだけは言い切れない“ひよこ”状態。

着眼点が面白い、なんて言って室長は人選権を持つ今も相変わらず私を直属の部下に置いてくれているが、

見合う仕事ができているのかいないのか、自信はない。

コンピュータと睨み合いを続けているうちに、どんどん他の社員が帰っていく。

あつという間に午後8時を回り、気づけば私と室長だけが部屋に残っていた。

しんとした中に、コンピュータのファンの音と、キーボードをたたく音、マウスのクリック音が響く。

工夫しろと言われた書き方に悩み、途中で行き詰った私は、ちらりと室長を窺う。

視線を上げないまま見ると、まず最初に目に入るのは左手。

左利きの室長は、左手でマウスを握る。

小さく手首を返し、ボタンとホイールの上をときどき指が滑る。

その手に、相変わらずどきりとさせられるのだ。

掌が大きく、指が長くてしなやかな、その手は男性の割には線が細い。

その手で、どんな風に触れるのだろう。

その手で触れられたら、どんなだろう。

そんなことを思わず想像せずにはいられない。

いつからそんな風に見るようになったのか、もうわからなくなっていた。

好き、なのだと思う。

見るたびにこんな妄想めいたことを想像してしまつくらいに。

室長には、浮いた話はなく、役員たちにしょっちゅう呼び出されては見合いさせられるも、

いつもそつなくこなし、そしてさりげなく断られるように仕向けているらしい、というのが専らの噂だ。

実はゲイなんじゃないか、なんていう恐ろしげな噂まで密かに出回っている。

まさかね、と思ったところで、急に室長が立ち上がった。

不意打ちにびっくり、と体が震え、顔をあげてしまうと、室長の訝しげな視線とぶつかってしまふ。

「なに」

「や、何でも、ないです」

壊れたロボットのような返答に内心冷や汗をかいたが、室長は何も言わずに部屋から出て行った。

荷物を持たないで行ったところを見ると、まだ帰りはしないらしい。室長の姿が見えなくなったところで、詰めていた息を一気に吐き出した。

「びつくり、した…」

まさか、見ていたことに気付いただろうか。

飯に気づいていても、頭の中で想像していたことまでは気づかれな idarou、とひとまず安心する。

そしてちつとも進んでいないレポートに視線を戻し、慌てて頭を仕事モードに切り替えた。

ディスプレイの前に、突然紙袋が差し出される。

ビルの向かい側にある、ファストフード店のマークが見えた。

「腹減つてると効率下がるだろ。こんなもんで悪いけど」

今出かけたのは、食料調達をしに行ってくれていたらしい。

残業のときは自分も最後まで残って絶対にひとりにしないこととか、食事をさせてくれるところとか、

こういうさりげなく優しいところに、だんだん絆されたんだろうか、私は。

感謝の言葉を口にしながら、室長から紙袋を受け取る。

その際に目に入った室長の指先に、またもやどきりとさせられて慌てた。

自分の席に戻るのかと思った室長は、私の左隣のデスクに自分の分の食べ物を広げ始めた。

その様子に少しだけ驚いて見つめていると、室長が目線をこちらに

寄こす。

「…戻ったほうがいい？」

「え？」

「ひよこが嫌なら、自分の席で食べるけど？」

「嫌じゃないです」

思わず即答してしまつて頭を抱えたい気分になつたが、いまさら撤回もできない。

「なら、ひよこも早く開けて食べば」

私の動揺なんて気にも留めていない言い方に、そうですね、と小さく呟きながら紙袋を開ける。

どうせ私は、“ひよこ”なのだ。

優しくしてくれても、それはそれ。

私の持つ感情とは全く次元の違う、“親鳥”の気持ちに違いない。ファストフードのハンバーガーですらキレイに食べる、その指先に視線を奪われながら、ちよつと落ち込む。

考え込んで食べるスピードの鈍った私をよそに、室長は隣で手早く食事を済ませていく。

そして私が半分も食べないうちに、後片付けまで終わらせてしまった。

私の様子をちらりと見た室長に気づき、さきほどこんなので悪いけどと言われたことを思い出した。

あまり進んでいないから気を遣わせたかもしれない、と焦つて少し多めに口に入れた途端、咽てしまった。

「っごほ、けほっ」

「おいおい、無理すんなよ。大丈夫か？」

慌てた室長が、飲み物を差し出して、背中を軽く叩いてくれる。

その手が触れた瞬間、背中にぴりりと何かが走った気がして、ストローを咥えたまま室長を見上げてしまった。

視線に気づいた室長は、何とも言えない表情を浮かべて手を離れた。

離さなくてもよかったのに……とは、もちろん言えなかった。

微妙な空気のまま、私はもそもそと残りのバーガーを食べる。

その間、室長はそのまま隣のデスクにいた。

ようやく食べ終わって、ペーパーナプキンを取り出そうとしたとき、室長がこちらを向いた。

「なあ、ひよこはさ。いつも見てるよな、俺のこと」

一瞬、何を言われているのかわからず、中途半端な姿勢で固まってしまった。

ぎしぎしという音が聞こえそうな、ゆっくりとした速度で首を左に回す。

「違った。俺じゃなくて、俺の手か」

「え……？」

意味のない音しか、出てこない。

気づかれていた、その衝撃が静かに全身に広がっていく。

動けない私の顔を見て、室長はふわりと笑った。

そしてそのまま、左手を伸ばしてきた。

その親指の先が触れたのは、私の唇の左端。

「ケチャップ、付いてた」

指に掬われたそれは、そのまま室長の口元に運ばれる。

恥ずかしい。

さっき背中に触れたのとは違う、明らかに意図的な接触に戸惑う。

でもそれ以上に、触れた一か所からじわじわと襲う甘い痺れに、居ても立ってもいらなくなる。

どうしよう、どうしよう。

もうここから逃げ出してしまいたい。

ついに腰を上げようとした私の、今度は両腕が掴まれて引き戻される。

「あ…」

「逃げるなよ」

両方の二の腕から、また新しい感覚が這い出す。

その感覚から逃げるようにギョツと目を瞑るけれど、逆に感覚が研ぎ澄まされたようで居たたまれない。

慌てて目を開けば、今度は目の前に室長がいて、別の意味で慌ててしまう。

「なあ、俺の手はさ、普通の手だよ。それでもひよこがこんな風になるのは、どうしてなの」

「ど、ういう…意味ですか」

「…俺の手を見てる時、自分がどんな顔してるかわかってる？ それにさっきから俺が触るたび、どんな顔してるか気づいてる？」

わかってるから、だから逃げ出したいのだ。
室長もそれをわかっていて、それでもそうやって聞き出そうとする理由は何？

「もう、離してください…」

「どうして」

「室長は、わかってるじゃないですか！なのに、ひどいです。私のことなんか何とも思っていないんだから、面白がらないで、放っておいてください」

手は緩まない。

外してほしくて、体を振ろうとするけど、びくもしない。

そのかわり、笑いを含んだ溜息が落ちてきた。

「強情だな。俺が何とも思っていないって、なんで決めつける？」

「え？」

「ほんつと“ひよこ”だよなあ。普通何とも思っていない子のこと会社で渾名で呼んだりしないし、

残業の時わざわざ一緒に残ろうとか、隣でメシ食いたいとか、絶対思わないと思うんだけど」

「え、あれ？ 残業って、私のときだけですか、最後まで一緒に残

つてくれてたのって…」

「…気づいてなかったのかよ。あれだけ俺のこと見てたのに、ほんとに手ばかり見てたんだな」

ひどい言われように思わず口を尖らすと、そこにちゅっと軽く唇が触れて、驚いて仰け反る。

室長の顔は、もう面白くて仕方がない、っていう雰囲気がありありと浮かんでいて、ちょっとむかつく。

ああ、それにしても、いつから私の視線に気づいていたのだろう。素直にその疑問をぶつけてみると、室長は少しだけ苦笑した。

「最初から。というより、そもそも俺が見てたんだよ」

「は？ なんですか、それ」

「だからさ。俺のほうが先に好きになってたってことでしょ。

そしたらいつ頃からか逆に視線感じるようになって、最初は半信半疑だったけど当確っぽかったから。

あーあ、言わせてみたかったんだけどな。結局俺が言われたか…」

いつ頃からか、って言うけれど、私が室長をつい見てしまうようになったのは、もうずいぶん前からだ。

ということは、それよりもはるかに前から室長が私を見ていたということになる。

そういえば、残業をし出してから一度もひとりきりになったことはなかった。

「…信じられない」

「ははっ、でも本当だし」

「だって、実はゲイじゃないか、とか噂されてたりしてましたし」

「はあ？ それ信じてたのか」

「え、いや…その、まさか、とは思ってましたけど」

根も葉もない噂に大げさな溜息をつく室長を見ながら、だんだんと驚きが落ち着いてくると、今度は嬉しさがこみ上げて来る。

しかも、これからは堂々と見てもべつに咎められたり焦ったりする必要が無いんだと気づいて顔が緩んだ。

「お前、今なんかよからぬこと考えてないか」

「えっ？」

「どうせ、今度から見放題とか思ってたんだろ。妄想だだ漏れ」

ほとんど当たっている言葉に、ぎくりとして室長を見上げる。

室長は擬態語で言うとなさに“にやり”という顔をして、私の腕を掴んでいた手を微妙に動かした。

撫でられるような感覚に、落ち着いていたはずの甘い痺れがまた這い出す。

「あ……」

「やつぱり、いいなあその顔。まあ、今度から俺も触り放題ってことで、おあいこだな」

おあいこ、って。

私が見るのとじゃ、全然レベルが違うんですけど。

相変わらず触られたままで、ぞくぞくする感覚に耐えている私は、口を噤んだまま心の中で抗議するが、聞こえるはずなんてない。

「バカな噂も、嘘だって思い知らせてやるよ。そのうち」

不穩でアヤシげな言葉に、さらにぞくりとさせられる。

室長は立ち上がると、私の肩をぽんつと叩いて、ついでに耳たぶを軽く抓んでから自分のデスクに戻っていく。

「とりあえず、レポートが先ね」

私は、耳を押さえてデスクに突っ伏してしまった。

室長は絶対DSだ。

こんなんじゃない、仕事なんてできやしない。

室長の小さな笑い声が聞こえて、なんでこの人を好きになってしまったのだろうと本気で考えてしまった。

マウスを握る手（後書き）

オフィスラブです。

とある残業日のシーンでした。

ステキな上司がいるって、いいですね…（遠い目）。

小物入れの中の鍵

臆病だったと思う。

信じるに足る人だと、頭ではわかっていたのに、怖くて逃げてしまった。

古い傷が痛んで、さらに新しい傷ができた。

定時で上がって寄り道もせずに家に帰る毎日。

お風呂に入って、食事もせずに、テレビをただ流してぼーっと過ごす。

何か考え出すと際限なく落ち込みそうで、あえて何も考えないように、頭の中を真っ白にする。

けれどそれも、ベッドルームへ行くまでの無駄な抵抗だ。

ベッドサイドのライトの仄かな明かりに照らされて、それはきらきらと輝いている。

蓋つきの小さな四角い小物入れ。中身が何なのかは、知らない。

小さいくせに確かな存在感を持って、私の愚かな決定を責め続けているように見える。

多分それは、自分が馬鹿なことをしたと、していると、本当はわかっているからだ。

―俺のこと、思い出したら。

そしたらその時に、開けてみてよ。

この箱は、そんな言葉と一緒に渡された。

諦めを含んだ、静かな声だった。

私は何も答えられずに、箱だけを受け取った。

3か月前のあの日。

聡史（さとし）は終始息苦しそうに話をしていた。
3年間関西の支社に出向の内示が出て、受け入れざるを得ないのだと。

仕事なのだからどうしようもない、ということは私にもわかっていました。

けれど、それと恋愛関係を続けることは私にとっては別の問題だ。
遠距離恋愛は、過去に一度失敗している。

それも、相手の浮気を目撃するという最悪の形で。

それ以来、遠恋は死んでもしない、というスタイルを貫いていた。
この話は聡史も知っている話だ。

だから、聡史は話している間中、あんなに苦しそうだったのだ。
私が、“別れる”と言っただろうことが、わかりきっていたから。

聡史の予想の範囲を超えることなく、私は別れると言った。

そう言うと思った、と静かに言われた。

そのとき、これで終わるのだと思うと、かつて無いほどの寂しさと喪失感に襲われた。

それでも撤回しなかった。できなかった。

怖くて、怖くて、たまらなかったから。

そして最後の別れ際、聡史はこの箱を手渡してきた。

“思い出したら”？

それどころか、今の私は、会いたくて会いたくて毎日辛くてしょうがない。

実のところ、忘れたことすら無いのだから。

限界はとづくに超えている。

ずっと、蓋を開けたくなくて、同じくらいずっと、開けたくてしかたなかったのだ。

今日こそ開ける。

毎日そう思ってきたが、それも今日で終わりにしようと思う。本当に、本当に、今日こそ開けるのだ。

ぎゅっと目をつぶり、覚悟を決めて指をかける。

そつと蓋を開けると、中身は銀色に光るものと、一枚のカードだった。

鍵だ。

一体どこの、と思い慌ててカードを捲る。

“美穂が、俺を信じてくれる気持ちになったら、

この鍵を使ってほしいと思う。”

俺が本社に戻る前までには、使ってくれてるといいと思うけど”

メッセージの下には、住所の走り書き。

「……」

急に嗚咽がせりあがってきた。

聡史は、一体どんな気持ちでこんなメッセージを書いたのだろう。

一体どんな気持ちで、この箱を渡してくれたのだろう。

信じてほしい、と言葉で言わせなかったのは、私だ。

私は自分のことばかりを考えて、聡史の気持ちを無視し続けた。

会いに行こう。

まずは謝って、それから、会いたかったと素直に言ってみよう。

もしかしたら本当は、ずっとそうしたかったのかもしれない。

多分、そうなのだ。

だからこそ、それからの行動は早かった。

翌日の空いている飛行機のチケットをすぐに手配し、出かけることにする。

けれど土曜日のせいかほぼ満席で、取れたのは夕方遅くの便だった。

ほとんど荷物も持たず、まさに飛び乗った、という出で立ち。

慣れない土地でタクシーを使い、ようやく聡史の家にとり着いたときには、午後8時を回っていた。

休日だから、もしかして家にいるかもしれないし、逆にいないかもしれない。

どきどきしながらアパートの階段を上がる。

扉の前で様子を窺うが、電気は付いていないようだった。

バッグの中から、小物入れを取り出す。

“使ってほしい”ということは、留守の時でも上がってもかまわないのだと思う。

けれどそれともうかと思い、鍵を握りしめたままドアの前に座って待つことにした。

10分ほどそうしていると、下で車の音がして、その後階段を上ってくる足音が聞こえ始めた。

他の部屋の人が帰ってきたのかもしれない、と思ってびくりとするでしょう、と焦りつつ動けないでいると、階段を上りきった人が目の前で立ち止った。

「お客さん？」

この場にいるのは、自分と今上ってきた人だけだ。話しかけられているのか、と思って顔を上げると、綺麗なひとがこちらを見つめている。

「この部屋に、来たの？」

「え……？」

この部屋、と言って指差したのは、私が背にしているドアだ。ぶわっと、嫌な汗が出た気がした。

ちらりと目に入った、そのひとが手にしているキーホルダが、見たことのあるものだった。

昔聡史が集めていた食玩のダブったものたちが連なっているもの。

「もしかして、美穂、さん？」

その言葉に、私は弾かれたように立ち上がった。

「失礼しますっ」

「えっ？ ちょっと…！」

後ろで何か言われた気がしたけれど、立ち止まらず振り返らずに階段を駆け下りる。

ちょうどあと数段、というところで、階段を上ろうとする人影とぶつかる。

はっと顔を上げると、聡史だった。

驚いたような顔の聡史が目に入ったが、今はそれどころじゃない。

「さよなら！」

小さく強く、それだけ叫んで、走り出した。

土地勘のない私は、闇雲に走った。

走ったことと、たった今のできごとのショックで、鼓動はひどく乱れている。

ちょうど大通りに出て、目に入ったコンビニに入った。

昼からろくに食事を取っていないのに走ったせいかな、視界がぐらぐらしている。

何か食べるものを買おうと思ったが、それでも食欲はない。

飲み物だけ買おうと冷蔵庫の前に行くと、ガラスにひどい顔が映った。

居たたまれない気持ちになり、結局何も買わずに店を出てしまった。

こんな惨めなことが、あるんだ…。

宛てもなく歩きながら、ただそんなことを考えていた。

携帯が鳴った。

さっきから、何度も鳴っている。

見なくても、聡史からだろうと想像がつくから、見もしない。

それでもすれ違う人から迷惑そうな視線が向けられ、音は切ろうと

電話を取りだした。

そのとき。

後ろから思い切り肩を掴まれた。

「美穂！！」

「痛……」

「あ、ごめん」

謝ってはいるが、力は緩まない。

聡史は、ずっと走っていたのか肩で息をし、前髪が汗ばんだ額に張り付いていた。

こんな風に追いかけてくるなら、どうして浮気なんかするんだろう。ああ、私が別れると言ったから、もう浮気じゃないんだっけ。

そう思ったら、今までどうにか我慢していた涙が、ぼろりと零れた。

「美穂……」

困ったように名前を呼んだ聡史の顔が、ゆがんで映る。

「あの、さ。今美穂が多分思ってること、絶対誤解だから」

「何それ、わけわかんない。言い訳なんてしなくていいよ。別れるって言ったの、私だし」

「美穂。なんでここ来てくれたの。俺を信じる気になったからじゃないの」

たった今、信じられなくさせたのは誰だ、と噛みつきそうになった時、聡史の携帯が鳴った。

ディスプレイを見た聡史は、私を掴む力を緩めないまま電話に出た。

「ああ。今、捕まえたから。免許証出しとけよ」

もしかして、さっきの綺麗なひとだろうか。

前半は私のことを言っているのだろうと思ったが、後半の意味がわからない。

しかも、浮気相手に私のことをわざわざ報告するのがまたよくわからない。

どうせ掴まえられて逃げられないのだから、おとなしくしていようと顔を俯けた。

電話を切った聡史が、私の顔を上げさせて、頬に残った涙の跡を掌で拭う。

久しぶりの感觸と温度に、逆立った気持ちがいだけ落ち着き、頑なだった心が少しだけ和らいだ。

「美穂。俺は、誤解だつて言った。美穂はどうしたい？」

信じたいなら、このままついてきて。無理なら、鍵はもう返して」「なにその究極の選択…。ひどいよ」

「じゃあ、ついてきて。お願い」

「それはずるい…」

「だから、誤解だつて言ってるじゃん。ほんとに信じられないの？」「わかつてるよ…ついてく」

聡史は嘘をつかない人だ。

それに、実はそれ以上に信じたいと思っている自分がいた。

部屋に帰ると、あの綺麗なひとはビール片手にソファでくつろいでいた。

そして私の顔を見るなり、笑顔で近寄ってくる。

「さつきはびつくりさせてごめんねえ。変な近づき方しちゃったからいけなかったのよね。」

私、浮気相手なんかじゃないからね。ほんとよ。ハイ、これが証拠」

差し出されたのは、免許証。

さつき聡史が電話で言っていたのはこれのことか。

「あ、苗字と本籍地が一緒…」

「そつなの。私、実の姉です」

「え、ええっ！！？」

あまりのベタな展開に、声がひっくり返ってしまった。

そういえば、姉が2人いるとか聞いたことがあるような…。

「あの、それは大変、失礼しました…」

勘違いが恥ずかしいやら情けないやらで、小さくなって謝った。

「いいのよお。それより、何かあったらいつでも相談しに来てね。聡史の弱点とか、いろいろ教えてあげるからね」

そんなことを言いながら、お姉さんはプライベート用の名刺を渡してくれる。

そして、外でエンジン音が聞こえると、邪魔者は消えます、なんて言って早々に帰ってしまった。

小さな嵐のような人だ、と思った。

ほっと一息つくと、掌の力が抜けて、握りしめたままだったものが滑り落ちた。

床に硬い音が響き、鍵が転がる。

拾おうとしたら、同じく拾おうとしてくれた聡史と指先が触れあった。

どきりとして一瞬手を引くと、鍵は聡史に拾われ、私の手の中に落とされた。

「あ、りがと」

言うのと同時に、腕を引っ張られ、聡史の腕の中に取り込まれる。あったかい。

じわり、と温度が伝わって、心音が共鳴する。

心まであたたかくなった気がして、素直に言葉が出てきた。

「…ごめんね」

「何が」

「信じてあげられなくて。逃げちゃって」

「ん」

「あと、ありがと」

「何が」

「信じさせてくれて」

「うん」

「…会えて、嬉しい。ほんと、ずっと会いたかったよ」
背中に腕をまわして、ぎゅっと抱きつく。

聡史の腕の力も増して、ぴたりと体が密着した。

「会いに来てくれて、ありがとう」

耳に滑りこんだ聡史の声が、充足感とともに体中に伝わっていく。肩越しに見えた、バッグの中の小物入れは、今度こそ美しく輝いて見えた。

小物入れの中の鍵（後書き）

遠恋のお話でした。

会えない分、不安とかいろいろ多そうですね。

いくらメールや電話やウェブカメラがあっても、ぬくもりは感じられないし。

結局、お互いの気持ちと信頼が命綱、みたいな気がします。

そんな切なさが少しでも書ければなあ…と思いました。が、中途半端だった気がします。

なんせオチがベタすぎましたので^^；

ちなみにお姉さんは、大学時代から関西住まい。

弟がかわいくてしかたなくて、しょっちゅうアパートに入り浸っていたりする人。

でももうすぐ結婚予定だったりして。

そんな裏設定も、まったく小説には反映されませんでした…（がくっ）。

増えすぎたCD

2分違いで鳴るアラームが頭上に3個。

おまけに3個ともスヌーズ機能が生きている、しかもその間隔も1分ずつときた。

どう考えても、嫌がらせとしか思えない。

「う、るせえ……」

朝が苦手な俺のためにアラームをかけるのは、あいつが帰る時の習慣だ。

泊っていつて、直接起こしてくれりゃいいのに、と何度か言ったが笑殺されて久しい。

そつえば、最近全然泊っていかないな。

前にあいつが泊ったのって、いつだったっけか。

最近の俺たちは、つまりそういう感じた。

つまんねえこと思い出しまった。

苛つきながらベッドから降りると、脇に積んであったCDたちに足がぶつかった。

「い、つてえ……!」

朝からろくなことがない。

足の小指は痛いし、積んであったCDがばらばらに床に散らばった。片づける気力もなくぼーっと眺めていると、同じジャケットのものが、何組か目に入る。

「あー、つたく!」

全部あいつのせいだ。

ここにいないあいつに向かって、意味のない悪態をついた。

きっかけは、1枚のCDだった。

高校に入学して1か月くらいしか経ってないときだったと思う。

どうしても欲しかったインディーズのアーティストのCDが売り切れで、へこんだまま翌日学校に行ったら、

あいつがその俺の欲しかったCDを持って女友達と話していたのだ。「なあ、それ貸して！」

全然話したこともなく、名前すらうる覚えだったのに、咄嗟に声をかけてしまった。

一瞬驚いた顔をしたけれど、あいつはそれからすぐに貸してくれた。話してみると、音楽の趣味はかなり近かった。

すぐに友達になって、いろんなアーティストの話で盛り上がって、距離が近づくのは早かった。

それからいろんなライブと一緒に行くようになったりして、夏休みには付き合い始めていた。

それから、もう7年。

青いガキだった俺はマスターコースに入り、あいつは一足先に就職している。

その間、相変わらず音楽の話題は尽きず、好きなCDを買ったり貸し借りしたり。

どちらのかもわからなくなったCD、同じCDを買って持ち合ったせいで同じものが2枚あるものも多い。

そのせいで俺の部屋には、ふたり分のCDがどんどん溜まっていくはめになった。

手持ちのCDラックではとうてい足りず、何個か買い足して、さらにこうして何段も積み重ねてきた。

増えすぎたCDの数と同じだけ重ねてきた長い時間を思うと、妙な気分だ。

蹴飛ばして散らばったCDのように、最近の俺たちの一緒に過ごす時間は、日々忙殺されて散っている。

どうして、今でも一緒にいるのか。

ふたりだとちよつと窮屈なところもあつて、でもそのくせひとりだと寂しい。

これは愛情ゆえなのか、それともただの情なのか。
この頃ではそれもよくわからない。

でも結局、離れるのは無理なんじゃないかと思っている自分もいる。

帰ろうと研究室から出たところで、メールが入る。

学校の入口まで来たから会えないか、というものだった。

あいつがここまで来たことは今までに片手で数えるくらいしかない。
何かあつたのだろうか、ずいぶん珍しいこともあるもんだ。

すぐ行く、と返信して足を速めた。

どこか、浮かれている自分がいることに気づいた。

門のところへ着くと、あいつは2人組の男に声をかけられていた。

7年も一緒にいるといい加減目も慣れてくるというものだが、あいつは実はけっこうキレイだ。

こんな場所にひとりで立っていれば、必ずと言っていいほど誰かに声をかけられる。

そういえば、最初のころはムキになって追ひ払っていた気がする。
懐かしいな、青かった俺。

この頃はそれも当り前のこと、みたいな変に達観したような気分だった。

今日は、いつもと違う行動をしたあいつに触発されたのかもしれない。

青い俺が、戻ってきた。

あいつの肩に手をかけて、少し強めに俺の陰に引き寄せた。

「悪いけど、こいつは売約済み」

そう言つて、そのまま手を取つて、歩き出す。

“売約済み” って、いつの時代の文言だよ、と青い俺に突っ込みを

いれつつ、ちょっとテンションが上がった。
ただ握られたままだった手に力が入って、握り返されたのがわかる。
ちら、と様子を窺うと、その眼には最近のいつもとは違う何かが見え隠れしていた。

ああ、こいつは気づいていたのだ。

俺と一緒にいながら、妙に冷めていた部分に。

そして、こいつも俺と同じようにどこか冷めていた部分を持っていたことも。

「もしかして、試した？」

「…どうかな。ケジメはつけたほうがいいかな、とは思ってたけど」

「それで、どうケジメつける気でいんの？」

「どうしようかな。売約済みみたいだし」

「じゃあ、おとなしく買われとけよ」

言葉で遊びながら、手が指と指を絡ませるつなぎ方に自然に変わっていく。

なんだ、俺たちどうせお互いが離れられないんじゃないか。

やっぱり、離れるのは無理だろうという俺の予想は、外れそうになり。

愛情でも、ただの情でも、もう構いやしない。

どうしたって好きなもんは好きで、嫌いになんて絶対ならない。

結局愛情だって、情のうちじゃねえか。

「指輪でも買い行くか」

「なにそのノリ。いきなりすぎ」

「そ？　じゃ、ひとまず今日は泊ってけ」

「それって、全然ケジメないし」

「久々じゃなか。やなの？」

「……やじゃないけど」

あ、やばい。

久々に、めちやくちや抱きしめたくなってきた。

「とりあえずさ、帰らない？」

「うん。あ、そうだ。今日CD買ったんだけど」
「げ」

朝散らばったままにしたCDを思い出した。

けどまあ、ずっと一緒にいるなら、どうせこれからも増え続けるのだ。

朝に、ふたりして蹴飛ばすのも、それはそれでいいのかも。

増えすぎたCD（後書き）

7年も付き合ってるって、どんな感じなんだろう。
と思いながら、書いておりました。

逆に結婚の踏ん切りがつかないそう…とか予想したりして。

男視点でも、意外と書けたのでよかったです。

俺、あいつ、こいつ、というのばかりで名前を出しませんでした^
^ ;

なんかちょっと独白チックで書けて、楽しめました。

事務用ボールペン 1

急いで上っていた階段の踊り場で、遠心力に逆らえなかったボールペンが滑り落ちた。

気づいて焦ってそちらの方向を向くと、今度は携帯電話までが落ちてしまった。

「何やってんの、あづさちゃん」

「相変わらずドジっ子だな」

からかうように笑う生徒たちの声に、内心で軽く悪態をつきながら、顔に苦笑を浮かべる。

その中の一人が落ちた携帯を拾ってくれ、別の一人はボールペンを拾ってくれた。

なんだかんだ言っても高校生、口は悪くても中身はかわいい子どもなのだ。

ボールペンを拾ってくれた子が、不思議そうな顔でペンを見つめている。

「あづさちゃん、このペン変わってるね」

「何これ、普通こんなん売ってなくね？」

「よく言われる。でも書きいいんだ。拾ってくれてありがとね」

受け取ってお礼を言ってから、また階段を駆け上る。

教科室が4階にあるというのは、もう何年もまともに運動していない身としては拷問に等しい。

次の授業の教室は1階で、下りきった途端使うはずのプリントが無いことに気づいて、駆け戻ってきたのだ。

教科室に入って、私は息を整えた。

拾ってもらったボールペンを見ると、せっかく落ち着いてきた鼓動が、また跳ね上がるのを感じて舌打ちした。

もう、忘れたと思ったのに。

小テストを実施している間、私はついボールペンを見つめていた。このボールペンは、もともとは私のものではない。元の持ち主の、綺麗な姿が思い浮かんだ。

5年も前の話だ。

私は母校のここで、教育実習生だった。

当時の生徒は明るく活発で積極的で、すぐに仲良くなれたが、ひとりだけそうでない男子生徒がいた。

窓際の一番後ろの席に座る彼は、担当の先生によると、頭はいいが無気力で扱いにくい生徒らしかった。

確かに授業中も、教科書もノートも広げず、ぼんやりと窓の外を眺めていることが多かったように思う。

けれど、綺麗な顔立ちと色素の薄い髪や目は目立ち、話をしたこと無いのに、視界の端にいつも映っていた。

友達が多いらしく、よく談笑している姿も見かけた。

話をしないまま実習は2週目に入り、残すところもあと3日だけ、という日。

私は報告書を書くために、教教室ではなく図書館へ行った。

その日に限って、普段談話室にしていることの多いベテランの先生方が、教科室にいたからだ。

自分の学生時代を知る先生もいて、気まずくて図書館へ逃げたのだ。階段を上って2階に行くと、奥の学習スペースの端に、彼はいた。

夕日が当たって、髪がきらきらと光っていた。

吸いつけられるように、私の足は彼の座っている場所まで自然と進んだ。

手元を見ると、何冊かの本が広げられ、彼はメモ用紙に何かを書きこんでいた。

「変わったボールペンね」

咄嗟に出たのは、その言葉だった。

初めて声をかけるには、些か不向きな気がしたが、言ってしまった

ものは仕方がない。

手を止めて顔をあげた彼は、私の顔を見上げて、少しだけ笑った。

「よく言われます」

実際、そのボールペンは変わっていた。

よく見るキャップ付きのものや、ノック式でクリップがついたものではない。

小さなホテルか何かのフロントや病院の窓口にあるような、全身真っ黒な細身の事務用ボールペン。

聞けば、彼の家は文具屋だそうで、一番安いが一番書き易いそのボールペンを、彼は気に入っているらしい。

話してみると、扱いにくいと言われていることが嘘のようだった。

彼は明るく快活で、よく笑い、話しやすかった。

やや遅れて、広げられていた本と彼が書いたメモを近くで見ても、私は驚いた。

「フリー工変換…」

2年生が春に見るものとしては、かなりレベルが高い。

この学校は理系だが、微積分は2年後期に触り程度やるだけだし、応用も3年で参考程度にやるだけだ。

頭はいいが、と言われたことを思い出した。

このときようやく、頭が良すぎて普通の授業レベルではつまらなかったのだ、と気づいた。

「だから、授業聞いてなかったのかあ…」

思わずつぶやくと、彼は気まずそうに顔を顰め、聞いてないわけじゃ、ともごもご言う。

その様子がなんだかかわいくて、私は思わず声を出して笑ってしまった。

残りの3日間、彼は授業中相変わらず窓の外ばかりを見ていた。けれど、時々ふと視線を感じたり、私が見ると急に視線が逸らされたりすることが多くなった。

私は私で、放課後は必ず図書館へ行くようになった。

彼はいつも同じ席にいて、数学を解いていた。

いつの間にか敬語の取れた彼と、バカな話もマジメな話もしたが、数学の話もかなりした。

フィボナッチ数列について目のきらきらを増して話したりして、よっぽど数学が好きらしかった。

こんな数学好きが教師だったら、楽しい授業ができるだろう、羨ましいと思ったものだ。

実際そんな風に彼に言ったこともある。彼は笑っていただけだったが。

そして、いよいよ最終日となったあの日。

私のボールペンの調子が悪くて、彼の変わったボールペンを借りたのだ。

確かに、書き易かった。

書き終わって、挨拶をして別れようと、ペンを差し出しながら言葉を選ぶ。

「じゃあ、元気だね」

またね、とは言えずにそれだけ言った。

ボールペンを掴むのかと思った、彼の手は、私の手首を掴んだ。

ほんの、2秒くらいだったかもしれない、無言で見つめあってしまった後、

彼がその手を強く引き寄せたせいで、私は座っている彼の上に倒れかかるようにして腕の中に取り込まれた。

「なに……っ」

抗議の言葉は、呑み込まれた。

触れられて初めて、実は望んでいたのだと、思い知らされた。

少しだけかさついた唇の感触と、簡単に捉まって絡められた舌の感触に、すぐに降伏する。

体の力を抜いてキスに応えると、後頭部を抑えつけていた手の力が

緩んだ。

代りに、うなじから背筋を辿って腰の部分まで、ゆっくりと撫でられる。

「んん…」

思わず漏れた声に、彼の口角が少し上がるのがわかった。

激しかったキスの応酬は、少しずつ緩やかになって、けれど余計に体の熱を燦らせた。

「あづさちゃん」

キスの合間、ほとんど唇をくっつけたまま、少しだけ掠れた声で呼ばれる。

生徒たちはみんなそう呼んでいたが、彼には初めて名前を呼ばれた。

「なに」

「…かわいい」

それだけ言って、またキスが降る。

頭がくらくらしで、熱で浮かされたようだった。

突然鳴ったチャイムの音に、私はびっくりと体を震わせた。

いけない、昔のことを思い出していたせいで時間を忘れるなんて。

「後ろから回収して。章末問題は宿題にします。今日は以上」

宿題、と聞いて生徒たちからブーイングが起こるが、笑ってその場を収める。

回収したプリントを持って、おざなりな号令を待った後、そそくさと教室を後にした。

そういえばあのときも、チャイムが鳴って、驚いて体を離れたのだった。

ああ、だめだ、また思いだしてる。

キスの感触と、彼に呼ばれた名前の響きが、まだ体に残っている気がする。

「あづさちゃん！」

呼ばれた声に、驚いて振り向くと、今まで授業をしていたクラスの

生徒が立っていた。

ばかな私、彼がいるわけないのに。

「どうしたの、すっげーびっくりにした顔してるけど」

「ごめんね。ちょっと驚いちゃって。どうかした？」

「小テスト、渡しそびれたから」

「ああ、ありがとう」

手に持っていたプリントを受け取り、まだ訝しげな顔をしている生徒にムリにほほ笑んで、その場を後にする。

無意識に唇を覆っていた手に気づき、内心で苦笑する。

結局、全然忘れてなんていないのだ。

事務用ボールペン 1（後書き）

続きます。

事務用ボールペン 2

その後、彼はそのまま階段を下りて行った。

「またね」

それだけ言つて、行つてしまった。

残された私は、彼のボールペンを手に握つたままだった。

実際、それ以上何かがあったとしたら、大問題だったに違いないから、それはそれでよかったはずだ。

けれど私の中には、燻つたまま消えない何かが残つてしまった。

ボールペンを捨てることもできず、苦勞して替え芯を買つてまで使い続けているのは、つまりそういうことだ。

彼がその後どうしているかは、もちろん知らない。

それなのに、どうしても最後の言葉が忘れられないでいる。

あり得ないと知りながら、忘れたふりをしながらも、いつか会えるかもしれないと今でも期待しているのだ。

そして、もし会えたら今度は、あのとき一度も呼べなかった彼の名前を呼んでみたいと思つていた。

「笹部 則幸（ささべ のりゆき）か」

「懐かしい、あの数学バカですね」

教科室のドアを開けた時に聞こえた名前に、私は凍りついたように立ちつくした。

今思い出していた、一度も呼べなかった、まさにその名前だった。

「今村（いまむら）先生、ちょうどいいところに」

話しかけられて、はつと意識を戻した。

普段は皆談話室にいるため、この教科室は事実上私しか使っていない。

その教科室に、教科主任と補佐の先生が何の用事だろうと思つていたら、プリントが差し出される。

プリントには、彼の情報が簡単に印字されていた。

「来週からの教生受け入れなんだが、数学科は一人だそうだよ」

「今村先生も知ってるんじゃないか？ 先生が教生で来た頃この生徒だったんだが」

「あ、ええ…少しだけ」

「あいつはほんとに数学バカでしたね」

「はは、そうだったなあ、まったく」

懐かしそうに笑う先生方に、扱いにくいと思われていたにしてはずいぶん柔らかい反応だと思う。

気になって、つい聞いてしまったが、逆に笑われてしまった。

「2年の途中からは、逆にかわいがられてましたよね」

「ああ、授業中あからさまにばんやりすることもなくなったし。

何より数学好きもここまでくるか、ってほどでな。よく談話室まで来て話しこんだもんだよ」

「その頃から教師になるなんて言っていましたけど、まさか本当になるとはね」

「そういや、あいつが変わったの教生帰った後だったな。誰の影響だったんだか。」

笹部の実習は、私が担当するんだが、今村先生は年も一番近いし、何かと相談に乗ってやってくれ」

「ええ、わかりました」

先生方が帰って行った後、私は溜めていた息をやっと吐き出した。

主任と補佐の先生は、私が実習でここに来た時もいた先生だ。

何も知られているわけではないのに、どこかどぎまぎした気持ちになった。

それにしても、彼が実習に来るとは驚いた。

しかも、昔から教師になると言っていたとは、まさか、私の影響ではあるまい。

そもそも一体どんな顔して会ったらいいのか、まったく先が思いやられる。

授業の準備を終え、小テストの採点も残すところあと2人、という時。

ドアがノックされた。

「どうぞ」

こんな遅い時間、どうせ数学科の誰かだろうと思い、顔を上げずに採点を続ける。

ドアが開いて、歩いてくる音は、だんだん私に近づき、人影が私の横で止まった。

「あづさちゃん」

その声に、採点していたペンは停止した。

まさか、と思いつつそろりと顔を上げると、あるときよりも大人びた彼が立っている。

けれどきらきらした髪も、吸い込まれそうな眼も変わらない。

「久しぶり」

「…本物？」

「ははっ、確かめる？」

ゆつくりと、顔が近づく。

あと、数ミリで唇が触れあいそうなところ。

「ストップ」

「あ、ひでえ」

笑いながら、素直に引き下がる彼に、少しがっかりしたりして。

「実習は来週からじゃなかった？」

「出入りしやすいのは卒業生の特権」

「だらしなく思われると心象悪いよ」

「ちゃんと挨拶してきたし。俺かわいがられてるから」

「そうみたいね。さっき聞いて驚いちゃった」

こんなに久しぶりなのに、意外と普通に話せてる自分に驚いた。

近況報告のような話をした後、少しの沈黙。

いつもより口が回ったのは、緊張のせいか、と思う。

何を話そうか、と思ったところで、彼の視線が固定されているのに気づく。

「それ、俺の？」

「え？」

視線の先を辿ると、あのボールペン。

しまった、と思うより先に、また、囚われる。

顎を捉えられて、まともに視線を合わせられてしまった。

「俺の、ボールペン？」

「そう」

「ずっと使ってたの？」

「…そうよ」

「俺のこと、思い出したりしてた？」

「してない」

「…うそつき。眼が揺れてるよ」

笑って話す声が、私を見つめる目が、顎に触れる指先が、甘い。

5年も経っているのに、そんな時間が何でもないように、すんなりと引き寄せられてしまう。

「俺、あぶさちゃんのこと追いかけてきたんだよ。

教師に向いてるかも、って言うてくれたことあったじゃん。だからやってみようと思って。

そしたら、友達の弟があぶさちゃんがここで先生してるって言うから。ここに実習受け入れ願い出したの。

いい加減、追いつかれてくんないかな。それとも、俺、もう追いつけた？」

「わかってるなら、聞かないで」

「じゃあ、さつき寸止めにしたキス、させて。5年ぶりなのに途中で止めるとか、ひどすぎ」

返事も聞かずに、唇が触れて、すぐに離れた。

物足りない、と咄嗟に思った。もっと、5年分のキスがしたい。

話ももつとしたい。あと、それから何だっけ。ああそうだった、名前が呼びたい。

「…笹部くん」

思ったより小さな声になってしまった。

初めて口にした音に、目の前にある顔が驚いたように私を覗きこむ。

「あづさちゃん、初めて俺の名前呼んだ」

「そうね。ずっと、呼んでみたかったの」

「知ってたの」

「何それ。当り前でしょ」

「下の名前は知ってる？」

「…則幸」

「うわ、いいなあそれ。今度からそうやって呼んでよ」

「ダメ。しばらくは教生でしょ。笹部くんのまま」

「あづさちゃん」

「それもダメ。私一応先生だし」

「生徒には呼ばせてるでしょ」

「ケジメつけなさい」

「じゃあなに、今村先生？ ふうん…ちょっと、やらしい感じ」

「な、なによそれっ」

「だって、こうなるから」

何が、と聞く前に、唇がふさがれる。

どうしてこう不意打ちのキスが得意なのかしら、と思いながら身を任せる。

「先生…」

キスの合間に囁かれるのは、名前じゃなくて。

この部屋で、この呼び方で、こんなキスをするのは、確かにまずい。

「その呼び方、やめて…」

「じゃあ、あづさ」

急にされた呼び捨てに、ときりとした。ほんとに、不意打ちが得意

で困る。

実習中はきっと、仕事にならないに違いない。

事務用ボールペン 2（後書き）

なんか、ちょっと長くなっちゃいました。

ひとつにまとめちゃってもよかったのかもしれないのですが、
なんとなく、分けてしまいました。

教育実習生、ってなんかステキな人たちでしたよね。

高校は、高専だったせいかな一度も来ませんでした、中学では毎年
何人が来てました。

先生よりも近くて、友達みたいに接してもらって、なんか楽しかった記憶があります。

実際彼らから見て、生徒がどう見えてたのかはわかりませんが…て
か、クソガキと思われてた可能性もありですけど^^;

あ、なんだか今さら心配になってきました…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9919y/>

半径2M以内で

2011年12月2日19時52分発行